

# 中川根ふる里通信

## = 第19号 =

編集・発行・モア・ラフ中川根  
 連絡先 〒428-00  
 静岡県榛原郡中川根町上長尾  
 郵便振替口座 859-6  
 <名古屋> 7-81556

# 徳山の盆踊り

～重要無形民俗文化財～





### 助役就任挨拶

#### 定住環境の浄化をめざして

八木 如心(上長尾)

例年はない台風に見舞われましたが、幸い大きな被害もなく去ってほっといたしました。

このたび、勝山助役の任期満了に伴う退任にあたり、八月二日付をもって助役の重責をお受けいたし早くも三ヶ月が過ぎようといたっており、時の流れゆく速さを痛感いたしております。

浅学非才の身であり、今後大変お世話になりますが、よろしくご指導の程をお願いいたします。

顧りみれば、昭和六十一年十月教育長に就任し、三年九月月末にわたり未知の教育行政に携わり教育の重要性を勉強させていたいただきました。

教育も時代の流れに、その対応が求められており、社会の変化に即応する教育、時代に生きられる人間育成のために、家庭教育を原点として義務教育として最小限必要とする基礎基本を習得する場として生涯学習の理念に立って進められ、科学技術の進展、情報化、国際化そして高齢化社会を迎え、まさに、生涯学習の必要性を痛感いたすところであります。

中東情勢は、世界的に深刻な問題を抱え、特に、石油問題は世界経済に危機感を与え、かつて昭和四十年代後半におけるオイルショックの再現のごとく憂慮される感を深めるとともに、多くの要因を抱えながら長期化の様相を呈しております。

私たちの町も、過疎化する山村のもつ多くの課題を抱え、歴史的背景をもちながら、地域の振興に努力いたしております。

山村の過疎化、都市の過密化と大きな不均衡の中で、政治的配慮が求められております。

人口の減少、特に、若年層の減少は、地域の将来に大きな不安をもたらします。しかし、現実には定住している私たちにあっては、この土地に定住するための生活環境の整備充実が最優先すべきものであります。

国土の六七%の森林を占める山村地域は、都市発展の陰において、国土保全と有益資源を守護してまいりました。その地域のもつ役割は大きなものがある反面、経済的にも環境的にも、都市と大きな格差がありました。

国においても山村の活性化に資するため、財政的な面においても優位な補助、融資制度の活用を図っておりますが、小規模財政からして建設事業投資も限度があつて、短期にして成果を上げることには困難であり、健全な財政運営計画に基づいて、その振興を図らなければなりません。

二十一世紀に向けて、時代は大きく変化をもたらす、先端技術の進展は社会構造を変え、情報機構は生活環境を高度化し、想像もできない時代の到来があるものと推されます。一方においては、高齢化が加速し、福祉、医療施策が大きなウエイトを占めるものと考えます。しかし、社会を形成するものは人間であり施策を實現するためには、人間の理解協同が根本的理念であり、豊かな心の育成こそ大切であります。

中川根町総合計画の基本理念である「水と緑に恵まれた豊かな生活のできる町」の将来像の具現に向けて、町民参加による行政運営に向けて、微力ではありますが、補佐役としての職責を果たしてまいりたい所存であります。

※後任教育長には堀畑和己氏(下泉)が十月十三日付にて就任されました。次回号にて紹介いたします。

# 10月1日 国勢調査 中川根は今

十月一日、国勢調査が行なわれ、日本に住んでいる人々の様子、細部に調査されました。五年に一度の調査に、私も高郷地区の一部六戸を、末端調査員として参加させていただきました。内容の持ち家、借家、面積などや、学歴などの調べは、統計上(国勢の)必要なのか、それらが国の施策にどの様に反映出来るのか、疑問に思いながら、(土地価格高騰、是正、教育費の減少などを期待しつつ)、国民の実態を知る重要な調査だと考えます。

この時期、改めて、合併時より現在までの中川根町の人口動態と現状をお知らせしよう。

※ 下記の表を見ると、中川根町の人口は、ここ三十年確実に減り続けております。(人口は生きているのですから、その年その年で多少ちがいはあるでしょうが、一年平均二八八人の減)このままの状態ですと、町全体の人口は五年後六、七五〇人十年後六、二〇〇人が予想されます。

※ 中川根町の高齢化率は二〇%となっており、全国平均の二、三十年先を進んでいます。その事は一世帯平均三、七六人の家族構成にも現われています。その構成も、夫婦+子供二人ではなく、夫婦(平均五、五、代)+父母もしくは子(後継者)、又は、夫婦二人の家庭(新婚ではなく、定年退職前後)が増えていきます。

※ 世帯数は三十年前とほとんど変わらない様に見えますが、学校や役場、商店のある地区(高郷、徳山など)住宅地として家が建ち並んで、人口の減り方が少ない反面、生活、勤務に不便な地区は、先祖伝来の地をはなれる人(世

次ページへ続く

## 中川根町 人口動態 調べ

※ 昭和37年10月、町村合併により、旧中川根村と徳山村、東川根村、文沢地区が合併され、中川根村となりました。昭和37年まで町河内人口に文沢人口は含まれていません。① 昭和37年、中川根町となる。

地区名	昭和37年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年10月	昭和35年 平成2年 比較	左記比較と 昭和35年との 減率
藤川	1,553	1,464	1,304	1,157	1,064	1,003	926	842	-622	42%
水川	686	715	660	590	546	478	452	431	-284	40
上長尾	883	872	794	718	683	645	614	602	-270	31
高郷	667	694	717	703	729	674	658	617	-77	11
八中	149	149	154	143	135	127	106	93	-56	38
梅高	592	632	590	557	531	478	454	413	-219	35
下長尾	520	523	538	512	494	452	444	405	-118	23
瀬平	431	432	407	355	328	303	274	264	-168	39
久保尾	641	610	550	503	459	424	382	337	-273	45
久野脇	778	951	683	577	548	519	506	472	-479	50
地名	1,036	1,002	917	806	775	743	725	696	-306	31
下泉	672	785	585	500	465	446	407	379	-406	52
壺町河内	138	146	126	124	118	106	97	88	-58	40
田野口	488	477	455	393	345	319	297	276	-201	42
徳山	1,812	1,776	1,806	1,700	1,687	1,578	1,567	1,481	-295	17
合計	11,036	11,228	10,285	9,338	8,907	8,295	7,909	7,396	-3,832	34
世帯数	1,918	2,074	2,032	2,024	2,012	1,991	1,993	1,967	-107	5
1世帯平均	5.75	5.41	5.06	4.61	4.43	4.17	3.97	3.76		

第)も多くあります。その人達は町内にとどまる人もいらっしゃいます。職場の多い東海道沿線の都中に移られます。



人口減の大きな要因は、子供の数が少なくなった事です。出生数は全国平均(一七八)よりはるかに多く、兄弟三人位の家庭は多くあります。では何故?と言う事になります。結婚適齢期の後継者(三、五口人?)が結婚しない、できない、と言う現状があります。農山村の嫁不足と全国的に言われていますが、男柱の職場の都市企業にも見られる現象と、職場での女性地位も向上して女性の人生価値感も大きく変化しています。それに加えて、我が町は成人男女の出合いの場も少ない様です。(青年団活動など)このまま年を重ねていったら……と大変心細くなります。



地場産業である農家、林業家庭が意外と少なく、三、四世代同居家族も兼業(養蚕期以外は、貸労、又は長男は会社員など)がほとんどと言えます。農業、茶業は機械化はして人手がいらなくなっており、林業の方は後継者が育っていない現状です。このままで行くと、山は手入れ不足となって、あれてしまうか、大地主復活かになってしまいます。町当局でも、農、林業者に、兼業であれば、何であれ、両立出来る複業を推進すべきだと考えます。しかし、茶業は、付加価値の高い農業だと思えます。全国ままだ。まずはお茶を呑んでいる人がいらっしゃいます。おいしくて、安いお茶を生産すれば……と希望があります。

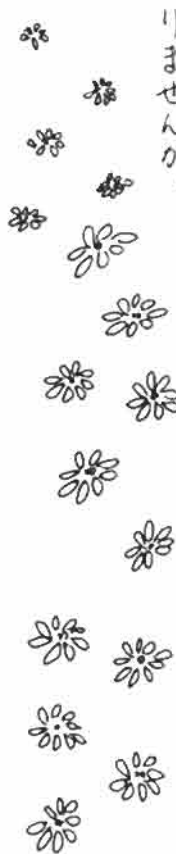


人口減少は、中川根町はかりでなく、農山村の全国的現象ですが、三川根の内、中川根町は一番減少度が少ない様に言われています。多くのダムをかかえる本川根町は、地区全体が無くなるほど深刻ですが、本川根町は静岡市に、川根町は島田市に合併?

なひとのうわさも過去流れました。川根茶、川根町産地のイメージも大と聞きます。中川根町は、都市化もあまりなく、観光傾注でもなく、独自の施策が必要に感じます。



今、日本は西暦二〇〇〇年代の高齢化社会を憂いて、様々な予想をし、考え悩んでいる様ですが、一足先に高齢化しているふる里では、これと言って実感はありませんが、子供達が少なくなっている事が、何よりもさみしく感じます。これがいつかに解消する方法は、上記の皆さんが結婚されることです。それはさておき、高齢化を逆手に取り、ふる里出身の皆様、職場の一端をしりぞかれた後は、又都会の生活につかれを感じた時は、公営の町で子育てされていらっしゃる方は、ヒターンされたらいかがでしょうか。土地もまた、手に入るし、豊かな自然があり、水もおいしい、こんなふる里でお住らしてはなりませんか。



# 渥美文雄さん逝く

第十号、人物紹介にてご紹介した光林堂の渥美さんが秋の彼岸、天国へ旅立たれました。渥美さんは、製菓業のかたわら町議会議員や老人クラブなど、町をこよなく愛され、町の為につくされました。特に中央小学校には、統合に向けてのご努力、子供達の為に、度重なるご支援を賜りました。現中川根町老人クラブ会長でもあり、社会奉仕の日々をすごされていきました。再婚はアイバンクに寄付され、今も現世を見ておられるかも知れません。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



遠い昔から現在までたえる事なく営まれて来た行事に、婚礼があります。この昭和四十年前後を境に大きく婚礼のやり方も変わって来ましたが、前者は嫁入り、後者は結婚式の言い方が似合うと思います。封建時代からの男尊女卑の色も少し残っている嫁入り、女性の地位の向上と物質豊かな現在の結婚式――

先日、成人大学(中川根町内)で金谷高校の中村先生が大井川周辺の歴史民俗のお話をされました。終りに、地づき歌を歌って下さいました。素晴らしい歌声を聞きながら「嫁入りの時の歌もあったっけな……めでたためだの若松さまよ……」と、婚礼も村の家組の家、そろつての祝いなんて時代は古き良き時代か……と考えていました。

後日、高郷の山本猪作さんに、少し過去の婚礼の様子をお聞きする事が出来ました。山本さんは、八十三歳になられますが、村会議員や部落長など、村のため地区のためになられた方で、茶時ちやときには、現役の茶摘師で、老人クラブ、ゲートボールなども活躍されています。今までに、四十三組の婚礼の仲人(世話人)をつとめられ、地区でも有名な方です。一番最初の仲人は、隣の小坂嘉一郎さん(今春永眠されました)方を受け持たれ、現在では、息子の陸義さんに、仲人役をゆずられているものの、数年前千葉に住んでいられた物の結婚式も、仲人をつとめられています。

- 婚礼の大きな違いは
- ◎ 家から家へもつた式から、出合い式(結婚式場)に変わった。
  - ◎ 仲人は、婿側一人、嫁側一人(男性)と決まっていたが、現在は、仲人は夫婦(二人)で引き受け、婿側仲人が両人を引き受ける事が多くなった。

家での婚礼は、料理を作ったり座を作ったり、かたづけをしたり、なかなか大変な事でしたが、親戚や隣近所たくさんのお援があった。現在の結婚式は、友達や職場の人達が多く出席されて、それも、短時間、に終り、合理的で良い事だと思ふ。との事でした。

# 嫁 入 り か ら 結 婚 式 へ

少い昔の嫁入りの様子を紹介してみます。

◎ 婿をつれて、花嫁の家へ出かける。仲人、婿、兄弟、つれ女、親戚など、三人、又は五人、七人と奇数でおむかえに行く。(両親は行かない)

◎ 花嫁の家には、すでに座が出来ていてとりかたれ。盃がかわされ、やがて花嫁が両親とわかれの盃をかわし、家をたつ。花嫁側の送り人は、花婿側三人ならば五人、五人ならば七人、七人ならば九人とやはり奇数と決まっていた。(両親は行って行かない)

◎ 嫁入り一行は、仲人の家に寄って、吸物膳をよばれ、遠方の場合、着物などをおしてから、花婿の家に入る。

◎ 花婿の家では、今かくと花嫁の到着を待っていても、時間はすきて夜になる事が多かつたという。

三、三九度の盃など、婚礼の儀が行なわれ、やがて花嫁をつれて来た人達は、花婿や親戚家族にたのんで帰って行った。婚礼の儀は一番座、二番座、三番座が終るころは、夜の白々としたという。

花嫁は、次の日から一家の働き手として、きびしい日々が待っていた。し、やがて出産育児となおいそがしい生活におわかれても、時の流れに、家の座を、確実に築き、生まれ育った実家の時間の二倍も三倍も生きぬいて行った。

## 長持歌

- いぐぞナー たのむぞヨ      明日ごろナー こがれたヨ
- ふた親さまヨ      この花だんす
- 長のナー お世話にヨ      受けてナー 喜ぶヨ
- アー なりまいたナーエ      アー 施主元でナーエ
- い何むナー 言うにもヨ      いこちのナー おかみさんはヨ
- 年若なれば      いつきても
- かけるナー ことはもヨ      金のナー たすきでヨ
- アー 後や先ナーエ      アー 米をはかるナーエ

# 開拓しない開拓団



大西林平さん(水川在住)は旧中川根村からもっとも早く満州に渡り、最後まで開拓団と運命をともにした人だ。家も土地も処分して開拓に参加したため、引き揚げ後は一から出直す苦労を味わった。現在は町はずれの小高い山の中間で、妻はる子さんと二人暮らし、子供五人が成人し、最近ようやく生活に余裕が出てきた。

昭和十七年二月、村を出て金谷町でおけ屋の職人をしてきた大西さんに、兄元一さんから突然の電話が入った。

「満州に行ってくれないか。」元一さんは板谷社吉助役から、開拓団より一足先に現地入りして受け入れ準備をする基幹先遣隊員になってほしいと頼まれていた。だが、「自分は農家の長男だから」と断り、代わりに次男の林平さんを推薦していたのだった。

突然の話に、大西さんは迷った。「その四年前に応召して華北に二年間行っていたから、満州を遠いとは思わなかった。けれど、永住となるとねえ。」自分たちも移住するから、という両親の熱心な説得もあって、数日後、満州行きを決意する。今では考えられない当時の時代背景が、大西さんの決心を容易にさせたのかもしれない。

四月になって、大西さんら六人の基幹先遣隊員は、中川根村開拓民の入植する竜江省鎮東県養保村の工を踏んだ。「満州国」のほぼ中央部、白城子の東に位置する鎮東県にはすでに県内から竜山、福田開拓団、磐田郡福田町送出、や浜松郷開拓団、浜松市送出、が入植していた。

山に囲まれた小さな村に生まれ育った大西さんにとって

## 特集 満州移民 その2

地平線のかなたまで平原が続く大陸の風景は新鮮だった。開拓団本部が置かれた前棉山昭という集落からは、約六キロ北にある満鉄線到保駅の給水塔まで見渡せた。

大西さんらが着いた翌日、中川根村から約百五十人の先遣隊が到着。前棉山昭と後棉山昭という二つの集落に分かれて入植した。

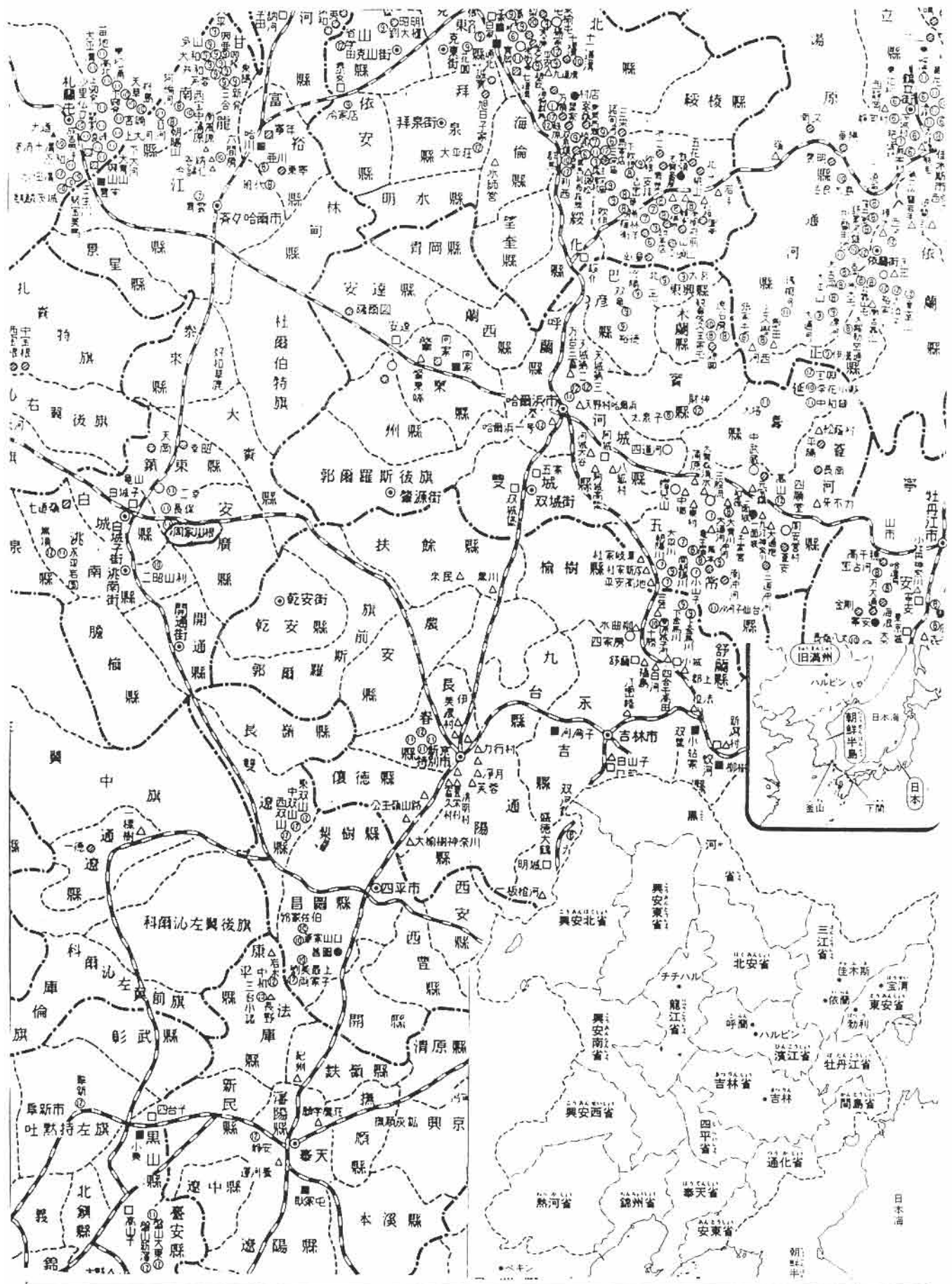
入植地全体の面積は約一千三百三十ヘクタール。一戸に割り当てられた土地は二十五ヘクタールもあった。内地にいたときの数十倍の広さだけに、馬でも使わなければ、とても耕作しきれない。だが、これまで、もっぱら茶の栽培に従事してきた川根開拓団の人たちは、馬の扱い方さえ満足に知らなかった。部落長を命じられた大西さんは、農作業が思うようにはかどらないのに頭を痛めた。それでも、初年度から大豆、コーリヤン、小麦、トウモロコシなどの作物が収穫できた。自分たちで食べる分以外の農作物は、固まるとめて県に供出した。静岡の母村にいた時のように、食べるに困ることなどはなかった。分村の暮らしを聞いて、母村からの移住者も少しずつは増えた。開拓団のスタートは、まずは順調だった。

それとは裏腹に、大西さんの胸中にはどうしても引かかることがあった。入植前、大西さんはまったくの荒野を開墾するものと思っていた。ところが、入植したら畑はすでに耕され、住宅さえ与えられた。ずっと以前からそこに住んでいた中国人を追い出し、タダ同然で買収したのだった。

大西さんは川根開拓団が「開拓しない開拓団」のように思えてならなかった。

### 中国人を追い出し、タダ同然で買収

# 当時の満州と竜江省(一部)付近図



久野脇の沢井公明さんは昭和十七年四月、川根開拓団の第一陣として満州に渡った一人だ。両親と幼い弟妹五人と一緒に、一家あげての大陸への移住だった。

沢井さんの父、愛明さんは、土木作業員をして家族の生活を支えていた。「同じ貧乏するなら百姓で貧乏する方がいい。土方は仕事が出来れば一銭も入らない。」長男だった沢井さんに、愛明さんは口癖のように言っていた。農家の出だった母ひろのヤンも、同じような考えだった。

「ぼくの親たちは、仕事がなくになると、そのまま収入が断たれるような生活に嫌気がさしていた。底辺の人間だった。もんで、満州へ行けば少しは生活が良くなるんじゃないか。そんな希望を抱いていた。単純で、国策に乗りやすい性格もあったのかもわかんない。」

中川根を出発する日は、朝から雨が降っていた。大井川鉄道の下泉駅から乗車する沢井さん一家は約百五十人の開拓団員を、大勢の村民が見送った。沢井さんは、村に残ることになった祖母が傘をさしたまま、泣きながら万歳をしていたのを覚えている。父愛明さんは、満州での生活が落ち着いたら、いずれは両親も呼び寄せるともりだった。

当時の日本人は「満州」と聞けば、連想するのは「赤い夕日」だった。入植地へ向かう汽車の窓から見る夕日は、たしかに赤くて大きかった。十歳だった沢井さんは、その雄大さに感動し、新しい土地への期待をふくらませた。

入植した当初、川根開拓団には、まだ学校がなかった。このため、学齢期の子供たちは四十キロ離れた竜山福田開拓団の国民学校で寄宿生活をし、教育を受けた。二学期になって、川根開拓団にも国民学校が開校した。児童数五十人、初めは八学年を二学期に分けての合同授業だった。

少年の満州

日本兵が我が物顔

# 偽りの日満友好

子供心にいや



教科は内地の学校とはほとんど変わりはない。ただ中国人の風俗や慣習を学ぶ『大陸事情』という科目があり、日本入は『満州国』の中でリーディングブックをとらなければならぬ。と教えられた。中国語も必修だったが、教師がおうす。十分は授業はできなかった。

沢井さんにとって、いちばんつらかったのは、娯楽雑誌がないことだった。あるとき、沢井さんは板谷団長の父、庄平老人から分厚い講談本を借り、一晩で読破した。電灯がなく、手製のランプを頼りに講談本は少年の愛読書となった。

もともと農作業が好きだった沢井さんは、両親を助けてよく働いた。「子供心に国のために尽くさなければいかん」と思っていた。国のために食糧を増産するんだ、という意識が強かった。先生もそう教育したし、ほくら先生に心酔していたから。だが少年の曇りのない目は『五族協和』をうたった『満州国』のごまかしを敏感に感じとっている。

「学校では、日満友好を教えられるのに、白旗子の町へ行くと、日本の兵隊が我が物顔に振るまわっている。馬車には夕日乗りするし、子供心にも鼻持ちならなかった。だから、ぼくらは兵隊へのあこがれなんかなかった。日本人のおとながお粗末に見えてしまうがなかった。」



昭和五十九年八月末、中川根町に住む元川根開拓団員六人が中国を訪れた。かつて開拓団があった鎮東県到保郷（旧養保）や敗戦後難民生活をした長春（旧新京）を回り、中国の土と開拓団員の霊を慰めた。

久野脇の植原忠一さんは町に帰った訪中国の話聞いて、四十年前の日々を思い浮かべた。昭和十七年四月、十一歳だった植原さんは両親と姉妹と弟の一家五人で入植した。

植原さんはかつて親しく付き合った人達の思い出をこの頃の争のように生き生きと語る。いちばん仲の良かった王林憲少年、村長の娘だったコーリーという名の愛らしい少女、クートさんと呼ばれていた農夫のことを――

王少年は植原さんより二歳ほど年上だった。年齢が近かったせい、すぐ仲良くなった。植原さん一家がいた集落のはずれに住んでおり、学校が終わるとよく遊びに行った。「カバ君」が広いので植原さんがよくそう呼んだ。王少年は「満州国側の中学校に通っていた。当時満州国民には日本語教育が義務づけられていた。植原さんは王少年が持っていた

「国語」の教科書を一緒に読んだ。王少年はすらすら読み、植原さんが知らない漢字まで知っていた。知り合ってから一年後、王少年はまだ十五、六歳の若さで結婚した。植原さんは父と二人結婚式に呼ばれた。王少年は赤いすすきをかけ、胸に白い花をつけて盛装していた。植原さんは兄が結婚するののように、心から祝福した。

コーリーは、当時七八歳。トウモロコシの皮でかきを作るのがうまく、植原さんは、実の妹のようにかわいがった。コーリーに子犬をもらったこともある。植原さんは「南」と名づけて大切に育てた。コーリーは父親が死んだ後、どこかへ引越して行った。植原さんの心は、ぼっかりと穴があいたようになつた。

学校の教え通りに

少年と中国人

心と心の付き合い

心のすみに優越感

クートさんは、植原さん一家と同じ集落に住む四十歳すぎの農夫だった。あるとき、クートさんは新たに入植してくる開拓団員のために、自分の家を明け渡さなければならなくなった。引越す前、クートさんは、植原さんらを夕食に招いた。当時日本人の開拓団員たちは、米や野菜、肉など小んだんに食べることができた。中国人家庭には米がなく、コウリヤンのおじやが主食だった。コウリヤンは、かんでもかんでも、パサパサして、おいしくなかった。冬になると、食事は一日二回しかとれなかったようだった。その晩、クートさんは、アワと肉料理をこちそうしてくれた。苦しい生活の中で、精いっぱいふるまっていた。植原さんは、クートさんが同じ集落のはずれに引越してからも、よく遊びに行った。敗戦の直前、開拓団が入植地を引き揚げる時も、クートさんは植原さん一家を途中まで見送ってくれた。

それほど親しく中国人と接していた植原さんでさえ、心のどこかに「満州」に対する優越感を持っていた。「満州国では日本人が他の民族をまとめるんだ。」国民学校で、そう教えられてきたからだ。

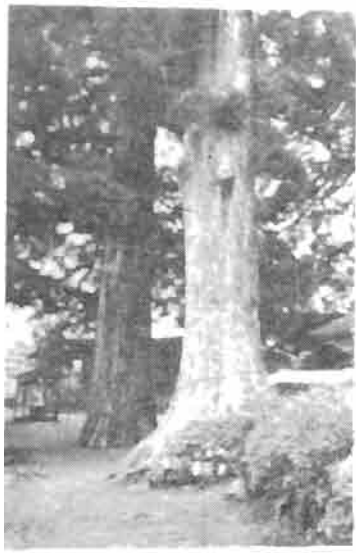
十年前、植原さんは、王さんに手紙を出そうとしたことがある。原稿用紙四枚に当時の思い出を書きつづけた。が、どうしても王さんの住所がわからなかった。「クートさんは健在だろうか。コーリーはあれからどこへ行ってしまったのか。」植原さんは、なつかしい人達と、いつか必ず再会できると信じている。

朝日新聞、静岡地方版、昭和六十年二月記載  
「静岡の戦争」もう一つの「中川根村」より

次回号に続きます。  
\*植原さんは今春四月永眠されました。  
ご冥福をお祈り申し上げます。

# 山住杉について

中川根の主要道路に国道三六二号線(静岡・春野・天竜線)があります。藤川から下長尾まで大井川沿いに瀬沢・久保尾を通過して周智郡春野町へ通じております。この国道は昔から昭和の始めまで東海道・裏街道として、三河方面から駿河に通じた(通行手形無し)街道沿いにつくられております。その道を春野町気田まで行きます。気田川(天竜川支流)沿いにかけて、寸又川の様な営林署と電源開発(門術国有林・豊岡発電所など)のつくった軌道あとに、森町から水窪町に通じる県道が通っております。その道を逆上って行くと、門術(水窪町)に出る。そこから急峻な道を登り切ると、山住峠に出ます。そこは歴史を秘めた秋葉街道との交差点にもなっております。そして杉の巨木に囲まれた山住神社があります。



山住杉に現存する山住神社

持っていらしゃい夜が明けた所で道の脇に置いて下さればいいですよ。」と提灯を貸してくれるという。山犬のおつかいが神社へもどすといわれ、小る里に残っている山犬の話と合せてやはり神通力かと体を

こわはらせて聞いた話——門前には左右に山犬が並び門には右大臣・左大臣が、社殿を守っている。山犬信仰のお宮なのかと考えて行くうちに、意外な歴史を知ることができました。

天竜地帯の育成的林業の成立時期は、徳川時代の中頃からと考えられるが、人工造林の開始は、文明年間(一四七二)といわれている。この人工造林創始期は、経済的用材造成林を目的とするものではなく、社寺境内の造林によって開始されている。天竜地帯で植栽の記録として残存しているものは、山住神社境内外の造林記録である。これは山住神社の宮司であった山住家二十三代目に当る大膳亮茂辰が元禄九年(一六九六)紀州熊野権現への参詣の帰途、多数の苗木を伊勢方面より持帰って植栽したものである。

この植栽は後記のように山住神社が度重なる落雷により、焼失した社殿の修復のため行われた。伐木を初め、御用材の伐出が度々行われたことにより、戸中、白倉、門術などの御林の蓄積の減少を憂いて大膳亮が行った事業であった。

山住日記によれば「元禄九年二月吉日植始め、杉・檜苗木伊勢三万本、是は伊勢神宮より船積吉田着、川舟にて新城迄積登し、新城より水久保迄馬づけ駄賃、それより山住まで続駄賃にてせおいあげ門術河内村人出植付申候」

とあり、山住大膳亮の苗木運搬の糸路と方法とが明かとなるが、当時伊勢から海路豊橋吉田まで運び、さらに舟便で新城まで運上した後、新城からは山また山の難路を馬の背に乗せて、水窪まで到着した。ここから山住までは馬の背は利用できません、人肩によって背負い上げて植栽したもので、その苦心の様が察せられる。

元禄十四年(一七〇二)には次のように植栽を拡大する目的



山住杉の伐採跡

この植栽に当っては轆轤師を入れ、雑木などを伐り払い、これを木地として徴し、植栽費用に充当したようである。  
「元禄十四年五月権現社廻りに杉伊勢此辺方々にて買求め、山々伐りて植栽入用等仕り候積にて木地引水七組、久保阿波十兵衛本メ(元禄)にて当社中込へ入挽し、山伐初尾は轆轤一挺につき、一ヶ年に全一両すつの積也」  
以上の外、山住記下には、造林についていろいろ日記が書かれている。元禄九年以降、山住大膳亮が植栽した本数は三十六本に上るといわれる。明治に入ってからは伐採し、東京市場に出荷したが、同市場では「山住杉」の名声を博した。  
④ 戸中山、白倉山、門桁山の御林からの伐木は、現存する山住家の石の資料によれば、徳川初期から行なわれている。これらの伐採は、幕府の御用のための伐出であったことは勿論であるが、山住権現(山住神社)の修葺料入手のための伐出が、非常に多かったと考えられる。その中でも享保十二年(一七二七)に門桁山より伐り出した山住権現之宮鳥居神宝などの修葺のための伐出については、当時の勘定奉行、勘定吟味役という、幕府の要路九名の連名により、十九代中泉代官、小林又右衛門に対する天竜川、川下川の指示が行なわれているが、このことから山住権現の

で再び伊勢に赴き苗木を買求めている。

地位が想像できる。

静岡県木枝史より

山住権現の修葺用材伐出証文(上記)

山住権現の修葺用材伐出証文(上記)  
御林伐出内訳(修葺用材含)慶安2年~元文3年(1649~1738)

年	月	伐出本数	樹種	価額	1両に付何本(単価)
慶安	2年7月	900本	榎	18両	1両に付 50本
貞享	5年	2,989本	榎	213両2分	14本
元禄	10年2月	5,127本	榎	256両1分	20本
	10年6月	5,372本	榎	268両2分	20本
	10年10月	10,499本	榎	-	記無
	11年	2,505本	榎	83両2分	30本
宝永	5年	17,430本	榎	871両2分	20本
享保	11年9月	8,045本	榎	-	-
	12年	26,088本	榎	1,255両	19本
元文	3年	10,441本	榎	918両9匁	-
		計			89,396本

余録

山住神社の家紋は、徳川家と同じ葵の紋です。宮司さんにお聞きしたところ、戦国時代末期、家康公が比叡の武田方を攻めた時、山住神社が支援した。やがて徳川幕府となり、家康公が御礼詣りに来られ、御刀を奉納され、山住神社へ葵の紋を与えられたとの事です。水窪民俗博物館にも、葵の紋の打掛袴が多数陳列されており、何故?の理由も判りました。水窪に木地屋の墓所があります。それも、山住神社と密接な関係があったように考えられます。そして、白倉山の右端、本川根町、不動岳の奥に、口ウ口場と言う地名が残っております。

お説びと訂正

※第十八号に載せました、マヌカ双樹の花は、ナツツバキでした。

秘迎の入滅した時植れた花は、ラワンと言って、亜熱帯に育つツバキがキ料の常緑樹で、日本では自然には生育していません。

ニメートルもの大木になり、家具材や建築材など、東南アジアの森林を日本が買って、地球の緑を失わねばならない原因(森林破壊)の樹木の一種です。写真はナツツバキと言った事で改めて訂正させていただきます。

※第十八号、町内祭りご案内にて、八月十五日、徳山浅間神社祭典

徳山の盆おどり、県指定無形民俗文化財が、昇格して、国指定無形民俗文化財になっており、改めて訂正させていただきます。

※十九号より字が以前より大きくなりました。大差はありませんが、しばらく続けて見ようと思っております。よろしくお願ひします。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 千円 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回(季刊誌)の発行を予定しております。

今回で購読期間の切れる方に郵便振替用紙を同封致しますから、引き続きご購読をお願いします。

年間予約600円のご送金をおすすめします。2・3年分のご予約も賜ります。購読期間が切れて、半年以上ご連絡が無い場合は勝手ながら中止とさせていただきます。

住所変更のありも是非ご連絡下さい。

お問い合わせ先

TEL 0547-56-0015

小沢節子

※私に通知票(郵便振替)

口座番号 名古屋<7>-81556

加入者名 中川根ふる里通信付



満州移民の記事は好評でした。続きものとしてまた二、三回あります。植原さんは若くして永眠されました。残念です。それにしても、ウラクのクエート侵攻が、三月がすぎるといいます。国連平和協力法案をめぐり、衝突が国中を駆けめぐります。用意されるお懸立が出来たし、アメリカは兵力増強の一歩、ウラクが悪い事は、たれもが理解出来ますが、ここ二百年、日本は日清、日露戦争を始めに、アジアの国々に多大な被害を及ぼしてきているのです。ウラクよりもっとひどい事を... 中国も、朝鮮半島の人々も日本のやり方を見ています。太平洋戦争の事、風化させてはいけません。日本を守る為の自衛隊は、平和のもと経済力の株にすぎない、実力をつけているのか。どうか、ベルギー、湾岸に一刻も早く平和がもどりませう。



暑い夏が過ぎて、天高く美しい季節が訪れて、来月、九月十五日、藤川大井神社祭典、十月二十日、上長尾八幡神社祭典には、何年かおりに奉納花火大会が行なわれ、夜空を色とりどり大輪の花は、とても美しく、祭りに花が咲きました。ふる里へ帰って、いらっやな方も多かった人は、と思ひます。



大井川鉄道、井川線、アプト式を見に来るのか、紅葉を見るのか、日曜祭日には大井川沿い(国道、県道)が自動車やバス、オートバイでいっぱいです。奥へくると、紅葉は、渋滞は、町内、いたるところで見られます。やはり、温泉や、山紅葉、魅力にあたりすぎるものなのではないか。和の、アプトに東って、皆様の報告を、たいと思ひます。